① 新堤落雁（にいづつみのらくがん）

「新つつみ清き堀江にすまんとや珍らかそうに落るかりかね」

碑は,新堤の養護老人ホーム北勝園みなと館の敷地内にあります。碑のある台地の崖下には,新堤溜池を望むことができます。

この地は眼前に水田が広がり,かつては,雁の群れが羽を休めに降り立つ光景が見られたのでしょう。今でも溜池には,羽を休める数種類の水鳥が確認できます。

② 八幡夜雨（はちまんのやう（よるのあめ））

「みとりなる色も黒みてやはた松いく夜ふりぬる春の霖雨」

碑は,八幡町の八幡神社境内にあります。

鮮やかな緑の松も夜雨のせいで黒くなってしまい,なかなか止まない雨を憂いでいる様子が伺えます。

伝説では,昔八幡太郎義家が奥州討伐の時,戦勝を占うため,松を逆さに植えたものがやがて高さ5丈あまりの大木になったといわれています。枝葉が柳のように垂れ下がり,これを「八幡の逆さ松」と呼び,海上からは航行の目印として利用されてきました。この松は,明治35(1902)年8月の大風で倒れてしまいましたが,現在根株が残されています。

③ 富士坂暮雪（ふじさかのぼせつ）

「ころ不二も駿河の富士も富士見坂道ふみ迷ふ雪の夕暮」

碑は富士坂の途中,那珂湊第二小学校へ向かう分岐点にあります。

しんしんと降り積もる雪が,通りや畑の境界をも消し去り,夕暮れの薄暗さも手伝ってか,慣れたみちでさえもまるで別の土地の景色を見ているような錯覚を感じたのかもしれません。

那珂湊第二小学校を過ぎ,少し行ったところにある富士見陸橋からは,空気が澄んでいる時は富士山が見えることがあるそうです。

湊八景（じせきざっさん）

「湊八景」は，選者不明ながら『事蹟雑纂』巻23に紹介されており，江戸時代の宝暦13（1763）年の記述があることから，徳川斉昭による水戸八景選定よりも約70年以前に成立していたことが分かります。その選定地も文献により異なるため，幾種類かの八景が知られています。

昭和58（1983）年に当時の那珂湊市教育委員会によって，『水門志』〔明治30（1897）年発行〕所収の「水戸那珂湊絵図」を参考に，石碑が建立されました。八景について，何時の頃に誰が作ったかわかりませんが，いくつかの和歌が伝えられており，あわせて紹介します。なお，和歌の表現等は，文献によって違っている場合もあり，『なかみなと文学散歩』（那珂湊市史編さん室編，昭和58年再刊）に掲載されているものを載せました（一部修正）。

④ 和田帰帆（わだのきはん）

「沖津波立ちさわらまし真帆引いて和田の汀によする釣舟」

碑は,ひたちなか市役所那珂湊支所正門の左側道路を進み,突き当たりを右手に進んだところにあります。

この「和田帰帆」と水戸八景「水門帰帆」は,同じ場所が選ばれています。

碑のある高台からは,眼下に港や那珂川河口を行き交う帆船で賑わう光景が見られたそうです。

⑤ 日和山秋月（ひよりやまのしゅうげつ（あきのつき））

「秋の夜のみちかにあらぬ日和山磯うつ波にうつる月影」

碑は,日和山（御殿山）と呼ばれていた市街地の中央部にある孤立丘陵で,現在の湊公園内にあります。

ここは徳川光圀の命により元禄11（1698）年に建てられた「賓賓閣」のあった場所でもあり,那珂川河口や太平洋が一望でき,茨城百景の選地にもなっている景勝地です。秋の夜の月が,波間に映り漂う美しい光景が眼下に広がります。

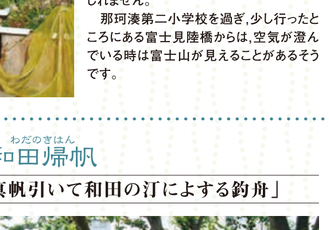
⑥ 関戸夕照（せきどのせきしょう（ゆうしょう））

「山の端に入る日の影のとりやらぬ関戸に照らす夕暮の雲」

碑は,国道245号線の那珂川に架かる湊大橋（平成24年5月に新橋が完成）のたもとの関戸水神宮の境内にあります。

昭和27（1952）年に完成した旧湊大橋架橋以前は,ここより約150m上流に関戸橋（昭和3年竣工）がありました。この架橋以前には,この付近に「関戸の渡し」があり,対岸の地を結ぶ渡船場がありました。

この地から見る夕焼けに染まる雲の明暗が,とても美しく感じられたことでしょう。



⑧ 舘山晩鐘（たてやまのばんしょう）

「入相のかねの音遠く舘山の響に波の花やちるらん」

碑は,舘山七か寺の一つ浄光寺山門の左側にあります。浄光寺は,水戸藩第2代藩主徳川光圀の社寺改革により,江戸時代の元禄9（1696）年この地に釈迦町から移されました。この時,光圀から浄光寺に,光圀の銘を彫った鐘が寄付されました。

幕末に,海防を重要視した徳川斉昭は,大砲鋳造（銅製）の材料として領内寺院の銅鐘・銅仏を供出させ,この鐘も大砲の鋳造のため溶かされてしまいました。その後,斉昭は鉄製大砲を鋳造するため,那珂湊反射炉の建造に着手し,安政4（1857）年に2基が完成しました。

遠く聞こえる鐘の音が,ゆっくり静かに過ぎていく夕暮れ時に溶け込んでいる風情が感じられます。

⑦ 峯山晴嵐（みねやまのせいらん）

「雲さそふ嵐も晴れて峯の山遠かたちかきあしほ筑波嶺」

碑は,国道245号の関戸交差点を柳が丘方面に少し入った左側にあります。

峯山はかつては,松竹が鬱蒼と茂り「入る矢も通らぬ…」といわれるほどでしたが,今は周りは削られごく小さな小高い丘となっており,山頂に三峯神社が祀られています。

雨上がりの朝もやの中,遠く筑波山を望む風景が幻想的に感じられたのかもしれません。

1 観涛所

2 庭上八景

ひたちなか市 八景めぐり

勝倉八景　中根八景　水戸八景　湊八景

ひたちなか市コミュニティ組織連絡協議会市民憲章実践部会
ひたちなか市教育委員会

平安時代の11世紀末から12世紀初め頃に,中国（北宋）で成立した瀟湘（しょう）八景図およびその八景詩は,13世紀後半の鎌倉時代後期に日本にもたらされました。

室町時代後期には近江八景が成立し,江戸時代には,金沢八景,その他宮島八景,江戸八景などが次々と登場します。また,江戸時代には八景の選定・見立ては,あらゆる階層におよび,対象とするところも景勝地のみならず,園内,自邸,座敷にまでひろがっていきました。

「水戸八景」以前に水戸藩ないし常総地方には,様々な八景が成立しており,「水戸八景」は江戸時代末期に徳川斉昭により選定されました。水戸周辺でも,幕末から明治時代にかけて八景選びが盛んに行なわれましたが,その風潮には「水戸八景」が大きく影響していると考えられます。

このたび,ひたちなか市内の「湊八景」,「中根八景」,「勝倉八景」について紹介するパンフレットを作成することになりました。

第3版（改訂版）　平成28年9月発行

水戸八景

「水戸八景」は，水戸藩第9代藩主徳川斉昭（烈公）が，天保4（1833）年に江戸の小石川邸より水戸に帰国した際に，藩内の景勝地8箇所を選んで選定したものです。水戸八景の地には，翌天保5年頃に斉昭自筆の書を刻んだ名勝碑が建てられました。いまに残る八景の碑は，いずれもこの当時のものです。

なお，吟詠詩としても，多くの人々に親しまれている烈公作の漢詩「水戸八景」の原文とその読み下し文及び「水戸八景」を詠った烈公の和歌を下記のとおり紹介します。

村松晴嵐（むらまつのせいらん）〔東海村村松〕

漢詩読み下し：遥（はる）かに望む村松晴嵐の後
和歌：真砂地に雪の波かと見るまでに　塩霧はれて吹く嵐かな

太田落雁（おおたのらくがん）〔常陸太田市栄町〕

漢詩読み下し：太田の落雁芳洲を渡る
和歌：さして行く越路の雁の越えかねて　太田の面にしばしやすらふ

山寺晩鐘（やまでらのばんしょう）〔常陸太田市稲木〕

漢詩読み下し：山寺の晩鐘幽壑（ゆうがく）に響き
和歌：つくづくと聞くにつけても山寺の　霜夜（しもよ）の鐘の音ぞ淋しき

青柳夜雨（あおやぎのやう（よるのあめ））〔水戸市青柳町〕

漢詩読み下し：雨夜更に遊ぶ青柳の頭（ほとり）
和歌：夜さめに小船くだせば夏蔭（なつかげ）の　柳をわたる風のすずしさ

仙湖暮雪（せんこのぼせつ）〔水戸市常磐町〕

漢詩読み下し：雪時嘗（かつ）て賞す仙湖の景
和歌：千重（ちえ）の波よりてはつづく山々を　こすかとぞみる雪の夕ぐれ

広浦秋月（ひろうらのしゅうげつ（あきのつき））〔茨城町下石崎〕

漢詩読み下し：月色玲瓏（れいろう）たり広浦の秋
和歌：大空のかげをうつしてひろ浦の　なみ間をわたる月ぞさやけき

巌船夕照（いわふねのせきしょう（ゆうしょう））〔大洗町祝町〕

漢詩読み下し：霞光（かこう）爛漫（らんまん）たり岩船の夕（ゆうべ）
和歌：筑波山あなたはくれて岩船に　日影ぞ残る岸のもみぢ葉

水門帰帆（みなとのきはん）〔ひたちなか市和田町二丁目〕

漢詩読み下し：水門の帰帆高楼（こうろう）に映ず
和歌：雲のさかひしられぬ沖に真帆上げて　みなとの方によするつり舟

※和歌は読み易くするために，読み仮名と濁点を付けました。

勝倉八景

「勝倉八景」は，江戸時代前期の頃，当時の勝倉の文化人達によって選ばれたものと思われます。

明治時代以降では，ほとんど世間から忘れ去られてしまいました。

富士山夕照（ふじやまのせきしょう（ゆうしょう））

富士山は，現在の勝倉小学校敷地あたりの地名で，この高台から眺める筑波の山並みに沈みゆく，夕映えの美しさを謳（うた）ったものでもあります。

一本松秋月（いっぽんまつのしゅうげつ（あきのつき））

一本松は，武田溜の東南の台地の先端あたりの地名で，秋の夕には村人達は，この丘にあった松の大木に集って酒盛りをし，満月を眺めては，夜の更けるのも忘れて楽しみあいました。

白山晴嵐（しろやまのせいらん）

かつては，白山は，一本松の台地が南へ半島状に突き出して，小高い丘を造っていました。この丘の上に古い枝ぶりのよい松が生い茂り，この松の梢を吹き渡る涼しい風が奏でるさわやかな響きが，当時の人々の風流心をそそりました。その後丘は切り崩され，付近の沼地が埋め立てられて田んぼとなり，昔の面影は失われてしまいました。

沼田落雁（ぬまたのらくがん）

かつては，沼田のあたりは一面の湿地帯で，苗代（なわしろ）時のくいな，夏のよしきり，秋・冬の雁，鴨など四季を通じて水鳥の楽園でありました。現在では，土地改良事業により水田となっています。

宮山暮雪（みややまのぼせつ）

宮山は勝倉神社の森を指したもので，境内の大杉に降りしきる夕暮れ時の風情を称えたものです。

阿弥陀寺晩鐘（あみだじのばんしょう）

阿弥陀寺は，今から約420年前の慶長３（1598）年に開山した寺院で，明治時代年間，道明寺と改称されました。

この寺の鐘楼から撞（か）きならす暮れ６つ（午後６時頃）の時の鐘が，夕餉（ゆうげ）の煙立ち上る勝倉の里に，余韻を残して消えてゆく光景は，まことに平和そのものであったと思われます。

下河原夜雨（しもがわらのやう（よるのあめ））㊟

下河原は勝倉の南端で，江戸時代幕末頃までは葦が一面に生い茂り，那珂川沿岸では最も開発が遅れた地域でありました。この河原にしとしとと降る，やりきれない長雨の夜など，故郷を離れて遠く奥州路をたどる旅人達の寂しい心を，強く撞（か）き立てるものがあったのではないでしょうか。

若宮帰帆（わかみやのきはん）

若宮は，地蔵根の台地が那珂川流域へ突出したところで，当時の那珂川は現在よりずっと幅が広く，若宮台地の近くを流れていたと思われます。

那珂川を多数の帆かけ船が往来し，台地から行き交う白帆の数々を眺める景色はすばらしく，まるで一幅の名画に接する思いがしたことでしょう。

㊟:現在の勝倉地内の小字で，「上河原」はありますが，「下河原」はありません。八景の地と考えられる那珂川沿いの三反田との境の小字は，「河原」と呼ばれています（字名が変更になったのではないかと推定されます）。

※武石　巌 著「勝倉今昔抄」昭和 59（1984）年発行，より引用（一部加筆・修正）

中根八景

「中根八景」は、大正12（1923）年に発行された『那珂郡郷土史』の中野村の項で、〔名所旧蹟〕として紹介されています。しかし、いつ誰によって選定されたかについては明らかではありません。

西中根の打越嘉重（かじゅう）氏によりつくられた八景の漢詩が伝えられており、あわせて紹介します。また、この八景の地に石碑が建てられましたが、これは東中根の西野茂男氏が、郷土に伝わる文化・史跡を未来に伝えようと平成8年頃より、数年かけて私費で建てたものです（碑文は旧字体）。

①長者ヶ谷津暮雪（ちょうじゃがやつのぼせつ）

「長者の住む所雪既に暮れ」

勝田第一中学校の南にある中丸川低地から延びる谷津を，長者ヶ谷津と呼んでいます。地名の起こりは，昔ここに長者が住んでおり，八幡太郎義家に滅ぼされたという伝説に由来しています。

薬師台アパート側から，田んぼ越しに長者ヶ谷津の夕暮れの雪景色を望んだと言われています。

碑は，長者ヶ谷津温泉敷地内に建てられています。

②福乗院晩鐘（ふくじょういんのばんしょう）

「遥かに聞ゆ福乗院の鐘の音」

中根小学校前の交差点を北に約550m進み，信号機を左折後，すぐ左折し，小道を約300m進むと福乗院跡にでます。

ここにたたずむと，黄昏に余韻を残して時刻を告げる鐘の音が，夕暮れの里に流れていく，当時の情景が思い浮かんできます。

碑は，薬師堂前のイチョウの大木の根元に建っています。

③宿ノ内夕照（しゅくのうちのせきしょう（ゆうしょう））

「宿ノ内の夕遠く斜陽に立つ」

柳町と同じように西中根台地にあり，南西側の中丸川を臨む水田に突き出た台地の縁辺部あたりが宿ノ内です。この台地から美しい夕陽を眺めて選んだと言われています。

碑は，県道から西中根会館方面に進み，会館前の道路を南側に向かい，2つ目の小道を西側に進んだところにあります。

④柳町帰帆（やなぎちょうのきはん）

「遠く帰帆を見る柳町の巷」

現在の柳町は，県道と西中根会館前の道路に挟まれた小字の名称です。碑は，西中根会館より約350m南東側の小道の交差点にあります。

古老の話によれば，明治時代の初めごろまで，帆掛け舟が那珂川を行き交う様子がここからも見ることができたと言われています。

⑤七兵衛滝夜雨（しちべえだきのやう（よるのあめ））

「夜の雨は七兵衛滝の音に和す」

大川に架かる堂下橋を東側に進んだところで，現在は草や木が生い茂る斜面緑地です。滝の名の起こりは，昔，打越七兵衛という人が，滝の近くに住んでいたことに由来しています。

かつては，水量が豊富で高さのある滝があり，滝の音が遠くまで響き，静かに降る夜の雨と微妙に調和した情趣がしのばれます。

⑥宮滝晴嵐（みやたきのせいらん）

「鹿島の社頭晴嵐を望み」

東中根にある鎮守鹿島神社の参道北側の小道を約200m進んだところに碑があります。そこは，狭い谷津田が入り込んだ所で，小さな池と滝がありました。

現在の宮滝はほとんど枯れた状態で，往時の面影はありませんが，かつては水量が豊富で流れ落ちる滝の音が聞こえたと言われています。

⑦大和田落雁（おおわだのらくがん）

「雁は落つ大和田の里」

中根小学校前の交差点を南に約1.3km進むと，大きくカーブする笠谷の坂に出ます。この坂の西側にある大和田の台地から，眼下に開けた田んぼの広大な空間に雁が飛び交い，雁の群れが刈田に舞い降りる光景を眺めて選んだと言われています。

碑は，笠谷の坂の手前の小道を西側に少し入ったところに建っています。

⑧八重崎秋月（やえざきのしゅうげつ（あきのつき））

「秋の月は高く八重崎に輝き」

八重崎は，虎塚古墳のある東中根台地南側の本郷川との間の水田地帯の小字でしたが，戦後の耕地整理事業に伴う字名変更で，現在はごく一部しか残っておりません。

碑は，虎塚古墳に隣接する県指定史跡の十五郎穴（横穴墓群）の一角にあり，ここから八重崎の刈田の水面に映る秋月の光を眺めて選んだと言われています。